

賀の久里浜に上陸し、頭からDDTで消毒してもらい、すべての手続きが終わり、金二百八十円をいただき十一日午後十時になつかしの我が家に帰りました。

サイゴンでの苦汁

滋賀県 澤 正 一

当然のように「澤正一さん来ましたよ、おめでとう」とまっかな一枚の紙を渡されました。いよいよ来たか、第二乙種第一補充兵編入。当時、我々が小学校のときから教育を受けてきたのは尽忠報国精神で、この戦争が神聖なもののように叩き込まれていました。

昭和十八年七月一日、舞鶴海兵団へ入隊すべし。当時まだ二十二歳の若さでしたのでみぶるいしながら張り切って入隊しました。

三百人ほどの召集兵は、上海海軍陸戦隊（二百人）と舟山列島（百人）に分けて配属になり、私は上海の陸戦隊に入隊、ただちに現地陸戦新兵教育（三か月）を受け

たのち、十一月一日づけで一等兵となり、關北部隊橋爪隊指揮小隊に配属を命ぜられ、管轄地の警備につくこととなりました。

上海事変及び大東亜戦争の歴戦の上官及び古兵のつわものばかりで、我々新兵は日々この人たちの顔色ばかりみて勤務していました。

十九年になると戦況はしだいかわってまいり、陸戦隊からもたびたび移動があったようでしたが、我々若い兵隊にはこまかいことはわかりませんでした。

そのころ、小隊長の従兵をしておりましたが、部隊の編成がえがあり、小隊長も他へ配属となって行かれることになりました。ときを同じうして私にも「澤、船に乗ってみないか」との言葉がありました。海軍軍人として海上勤務もやってみたいと思ひ、すぐ返事をしました。十九年七月、海軍の徴用船芝還丸輸送船の警戒要員として乗船し、大陸沿岸航路、軍隊及び物資輸送に従事しました。今も忘れません十九年十月、勤務中中国青島にて、台湾沖敵機動部隊と交戦し、大戦果をあげたとの報を聞き、ばんざいをあげたものでした。

昭和二十年一月八日、ベトナムのサイゴンにいのちからがら入港、物資積込作業中の十二日八時から敵機動部隊の空襲を受け、港に停泊中の艦船はことごとく沈没または炎上し、陸地の軍事施設も破壊炎上し、わが芝還丸

も午前中は二十五ミリ二連装でげいげきしていたが第二波ののち、ついに爆弾二個が機関部と船尾に命中、炎上し、隊長の池田上等兵曹が爆弾の破片を頭部に受け即死（戦死）される。残る七人は小山一等兵曹の指揮のもと戦死した池田上曹の遺体を毛布にくるみ、ボートで退船したのち、サイゴン海上警備隊へ行き、そのごの行動の指示をおおぐ。

池田上曹をだびにふし遺骨を海軍陸上警備隊に安置し、我々はサイゴン対岸にある防空警備隊に仮入隊となり、日々防空機銃及び高射砲陣地の構築に従事する。たまたま上海の航海船舶があり、我々は池田上曹の遺骨にわかれを告げて帰隊の途につくが、この船も航海中に敵B29五機に空襲され護衛艦（駆潜艇）及び船舶四隻ことごとく被弾沈没する。我々の乗船もともに沈み、海中に飛び込み、すこし泳いでいたが浮遊物の筏（竹を二メー

トル程にきって十本ほどをたばにしたもの）につかまり遠くにかすむ山波を目標に片手で筏を持ち、片方でこぎ、陸地に近づくように泳ぐ。

時間はわからないが、四、五時間波間を泳いでいただろうか。突然、帆を張ったジャンク（中国の舟）が、こちらへやってくるのがみえました。大声でどなり手をあげて助けをもとめました。幸か神助か浮いている者たちを舟に引きあげている。我々もこの船に助けられた。

このジャンクは沈没した舟の浮遊物をひろっていた。しかし我々には九死に一生の助け舟だったのだ。この後、この土地の漁港らしき舟着き場の上陸した。土地の漁民たちも好意を示してくれ、その夜は土間で一夜を明かす。翌日、小山兵曹が我々を心配してさがしにきた。生き残った者たちがツーロンへ行き海軍設営隊の宿舎にはいる。設営隊が通信基地（地下壕室）設営に従事、着のみ着のままの生活が三か月続いた。

上海帰隊の望みもたれてハイホン海上警備隊へ編入され、陸路汽車で行くことになる。昼間は敵機空襲のため夜行動をするも鉄橋が爆撃でみなおとされているため

に陸軍の工兵隊が川を渡してくれる。

二十年五月頃ハノイへいく。機関参謀今井平八郎少佐と通信隊があったのでこの警備につく。

昭和二十年八月十五日、少佐から重大ニュースがあるからと少佐の部屋で終戦の詔勅を聞き、皆号泣す。その後ハイホン警備隊へ少佐と共にハノイを去る。

中国軍の進駐、武装解除、中国軍の命にて機雷掃海に従事、翌二十一年四月アメリカ船で帰国。九里浜通信隊に上陸、帰郷する。

ポナペ島従軍記

鳥取県 菅井元吉

昭和十九年一月十五日、広島の子品港で仮装巡洋艦「赤城丸」に乗船、二十三時三十分護衛駆逐艦「涼月」「初月」とともに一路南方めざして出港した。

明くれば一月十六日、わが船団は「赤城丸」を中心とし、その前方右に「涼月」左に「初月」を護衛として豊

後水道を通過し危険海域に出た。

ちょうど正午まえ、突然異変がおきたようで甲板にしようとしたら誰かがおおごえで「でるな、邪魔だ、はい」とれ、「と叫んだ。船倉にはいったとたんドカンドカと砲声が聞こえた。

これはただごとではないぞと思っていると、我々のいる場所よりしたの方から盛んに爆雷をつりあげているのがみえた。やがて砲声は聞こえなくなった。これは敵の潜水艦に対する威嚇射撃であった。このときわが船団は敵潜水艦の魚雷攻撃を受けたのである。右前方にあった「涼月」に魚雷が二本命中、乗艦していたわが第四中隊は一瞬にして八十九人の兵員を失った。

「赤城丸」も魚雷を二本みまわれたが、見張りの海軍の下士官が魚雷の航跡を発見し、船はジグザク航路をとってからも魚雷をさけ、難をのがれることができた。

「涼月」は僚艦「初月」にえいこうされ「赤城丸」ともども引きかえして九州の佐伯湾に入港した。

佐伯湾で碇泊中、第四中隊の隊長以下生き残りの全員が「赤城丸」にうつり、「赤城丸」は錨をぬいて出港し、